The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	加藤先生のお人柄
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	語文. 2020, 115, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

加藤先生のお人柄

瓦　井　裕　子

平成十九年、京都の私大に通う三年生だったとき、発表の調べものの中で加藤先生のご論文を偶然手にした。論文を読んであんなに胸が高鳴ったのは初めてだった。どうしてこの人はこんなところに気が付くのか、どうしてこんなに明快に論じていくのかと、たちまち魅了された。こんなふうに私も物が見てみたいと、勉強嫌いの大学生が、無謀にも先生のいらっしゃる大阪大学大学院を目指すことになったのだった。とはいえ、あんな論文を書くのだから、とんでもなく厳しい恐ろしい先生かもしれない。こっそり四年生の春から夏にかけて懐徳堂講座に通ってみると、先生はまだ生まれたばかりのお子さんの写真を受講者たちに見せて、それは嬉しそうにしていらっしゃった。ご論文の印象とはかけ離れたお姿に安心した私は、九月に大学院を受けて、なんとか拾っていただけることになったのだった。

「それ、先生にはできても、私たちには絶対無理やんな…」、大学院演習が終わった後、院生だった私たちはよくそう溜息をついていた。先生は発表を黙ってお聞きになったあと、そもそもの大前提を覆すような、こちらが考えてもみなかったことをさらっと指摘なさる。今した発表が拠って立っていたものは崩れていき、その荒野から必要な材料だけをぱっと拾い上げて、こちらがあっけにとられているあいだに新しいものを創り上げていく。それは鮮やかとしか言いようがなかった。論文にしたらおもしろいには違いないけれども、私たちの力量では到底無理で、やはり先生にしかできないものだった。でも、先生はそれを院生にも求められ、前提を覆そうとしない発表はお叱りを受けた。学部時代に読んで憧れた先生のご論文、研究者になるつもりもなかったのにどうしても先生のところへ進学せざるをえないほど私を魅了した先生のご論文の、緻密で実証的なのに大胆な魅力が、授業の端々に光っていた。

先生はいつも通説や前提を信じなかった。あの気の遠くなるような時間と労力をかけて作られた『源氏物語』『伊勢物語』の校

本、まだ本になっていないさまざまなご研究。基礎研究をあれほど堅実に整備される一方で、常に良い意味での野心家でいらっしゃった。今はまだ、先生のご研究を振り返るにはあまりに辛い。完成させられずにお逝きになったご無念がのしかかってくるようで。

先生のご葬儀は、阪大のすぐ傍で行われた。私は斎場を後にしてもすぐには離れがたく、なんとなく阪大へ向かった。四階の研究室には誰もおらず、先生の研究室だったあたりで茫然としていると、その部屋の火元責任者が「加藤教授」のままになっているのが目に入った。急に、「この部屋の火元責任者は私ですからね、まあいいでしょう」という何年も前の先生の言葉が蘇った。卒論の提出時期に、先生は研究室で鍋パーティーを開かれるのだった。鍋と手巻き寿司と、先生お手製のローストビーフや二種類のチーズケーキ。美味しい美味しいと言って食べる学生たちを、「そんなもの簡単につくれるよ」とおっしゃって楽しそうに眺めていらっしゃった。先生はほとんど召し上がらなかったと思う。先生はごくごく少人数の会食でしか、ほとんど箸をおつけにならなかった。

誰もいない四階に留まっても詮のないことなので、外へ出た。足は自然に共通教育棟裏の駐車場に向いた。私たち院生はここからお車に乗せていただいて、琵琶湖や神戸や心斎橋、いろいろな所へ行った。先生は院生たちと出かけるのを、少し面倒そうな素振りをなさりながらも、楽しんでいらっしゃったようだった。いつからか、前期が終わると千里阪急や宝塚ホテルのビアガーデンへ行くようになった。後期には少し遠くまで食べにいった。やっぱり味見程度にしか召し上がらない。ご自分は召し上がらなくても、院生たちが食べるのを見るのはお好きだった。私なら自分が食べないのに食事に連れていくなんて考えられないけれど、先生はそうだったのだ。いつもご自分が手にするより、人の楽しそうにしているのを見ることを喜んでいらした。

千里阪急へはモノレールに乗らないといけないので、私が車でお送りした。緊張しながら普段の三倍は丁寧に運転した甲斐あって、「瓦井さんらしい運転だね。また乗りたくなるよ」と褒めてくださった。続けて、「研究も同じだね」というようなことをおっしゃったと思う。博論の口頭試問では私の論文を評して「危ういダンス」とおっしゃったけれども、どちらがどうだったのか。それからも何度か先生は助手席に乗ってくださった。研究以外で先生のことを振り返ると、思い出はいつも車の中だ。

最後に先生にお会いしたのは、今年の三月だった。神戸のホテルオークラでお茶を飲みながら、窓の外のハーバーランドを眺めて、「そういえばあそこに行きましたね、よりによってクリスマスイブにねぇ」と笑われた。「観覧車に乗ったんだっけ?」「みんなで乗ろうと言ったんですけど、あの日は午後から会議がおありだから、乗らなかったんですよ」、先生は会議があるのに院生たちが行きたいと言ったから、わざわざ連れてきてくださったのだ。お茶をしながら、先生は妹さんに時計をプレゼントしたいとおっしゃって、どんな時計がいいかたずねられた。その前にお会いし

た去年の年末には、奥さまにバッグをプレゼントするとおっしゃっていて、どこのものがいいかたずねられたのだった。ご自分のものにはご興味がなくても、周りの人たちを喜ばせるのが本当にお好きだった。

オークラから元町駅まで送っていただく短い時間、とても驚くことがあった。先生の運転免許がゴールドだというのだ。「そんなこと信じられません」と言うと、「失礼だなぁ、もうずっとゴールドだよ」とおっしゃる。先生のお車に乗せていただいた院生たちは、きっと誰もゴールドなんて信じない。大型バイクに乗って高速でBMWと追いかけっこをした話や、鍋パーティーのとき文学部棟の前にすごいブレーキ音を立てながら横滑りのようなバックでお車を停めて皆を驚かせたこと（後輩は私の腕をつかんで「あれ本当に大学教授の運転ですか⁉」と叫んでいた）、アクセルの踏み込み、シフトチェンジ、どれをとってもゴールドの要素はなかった。でもゴールドだったんですね、なんだか先生のご研究みたいだ。「コロナが落ち着いたら会いましょう」と言って別れたが、それからすぐに緊急事態宣言が出され、とてもお会いできる状況ではなくなってしまった。

七月、あと二年弱に迫った先生のご還暦に合わせて記念論集を企画し、松本が先生に打診した。先生は快諾してくださった。そのテーマにも、先生は何か新しいものを求められていた。「享受とかはもう目新しくないから、何かまったく新しい切り口でやりましょう」、テーマを提案する係に指名された私はとても悩まされた。ご自身も、執筆する弟子たちの半分も享受の研究をしているのに、先生の中ではもう享受は真正面のテーマにはなりえなかった。新しい切り口、新しい概念。先生はそれを追い続けてここまで研究していらっしゃったのだろう。結局、新しい切り口は見つからなかった。何度かやり取りをするうち、次第に私は、その論集が還暦記念としては出版されないかもしれないことを悟らざるをえなかった。快諾なさったと聞いたときから、無性に恐かったのだ。いつもの先生なら「そんなこといいよ、それより自分の研究をしてください」とおっしゃると思っていた。先生は、そこに何か希望を見出されていたのかもしれない。論集の話をしてからまだ二ヶ月しか経っていないのに、こうして追悼文を書いているなんて。

九月初旬、去年書いた論文がある賞をいただけることになり、すぐ先生にご連絡した。きっとそれどころではないだろうに、先生はたいへん喜んでくださった。私の心中を言い当てた短い文章が記されていた。私は泣きじゃくりながら返信した。多分お互いに、これが最後のメールになることが分かっていた。

先生がもういらっしゃらないというのがどういうことなのか、私にはまだ分からない。急逝はいまだ信じがたく、悲しみの淵はあまりに暗い。

私は何もかも遅かった。著書をお見せするにも二週間間に合わなかった。あれほど喜んでくださった授賞もお見せできない。それに、私が今の研究を始めたときからずっと期待をかけてくだ

さっていたこと。何年もずっと見つからなかったけれど、今年に入っていくつか例が目につきはじめた。「コロナが落ち着いたらお会いしてお目にかけたいです」、結局そう言ったまま見ていただくことができなかった。どうして何もご恩返しできないままになってしまったのか。本当に、どうしようもない不肖の弟子だ。

でも、そんな後悔も小さなことだった。あの日の明け方、ご逝去の報とともに伝えられたやり残されたお仕事への思いは、決定的に私を打ちのめした。先生のご無念は、本当にいかばかりだったか。遺された私たちは、先生のお仕事を世に出していかなければならないと思うものの、いったい何ができるだろう。先生のご研究は、先生にしかできないから輝いていた。

お伝えしていたこともある。先生の下で研究できてどんなに幸せか、先生をどれほど尊敬しているか。それは事あるごとに申し上げていたように思う。たぶん話半分にお聞きになっていただろうけれど、今なら分かっていただけるだろうか。いつかまたお会いする日、「まあ頑張ったんじゃない」と言っていただけるように、悲しみの淵からもまた、歩を進めなくてはならない。

先生、あらゆることが偲ばれ、痛惜の念は募るばかりですが、今はただ安らかに永眠されますようお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

（かわらい・ゆうこ　就実大学講師）